リー館での想い出

藤山(旧姓古沢)康子　〔松蔭短期大学家政科 S.37年卒〕

今から55～56年も前の想い出になります。私は、「リー館」と呼ばれていた、神戸市中央区山本通のリー先生のお宅でお世話になり、聖ミカエル国際学校の学生、松蔭短期大学の学生や沖縄からの留学生(当時の沖縄は、日本領ではなく、米国領でした)と一緒に生活していました。

今の若い方々には想像もできないことでしょうが、この「リー館」では、門限が午後 8 時、消灯が午後10時だったのですよ！

当時は、いろんな大学のグリー・クラブなどの主催する音楽会などにお誘いいただきましたが、いつも途中で帰宅を余儀なくされていました。それでも、時には帰宅が 8 時を過ぎることもあり、当時、先生のお手伝いをされていた山元久子さんに頼み込んで、内緒で裏口のカギを開けていただき、ハイヒールを脱いで、抜き足、差し足でこっそりと帰宅したこと、今ではいい想い出です。

私の部屋は 2 階の 2 人部屋で、真下が先生のお部屋でした。当時は遮光カーテンなどありませんでしたから、お向かいのお宅の窓に私たちの部屋の明かりが映るため、消灯時間を過ぎても明かりがついているとまる分かりで、下から「トン、トン」と突かれたものでした。翌朝は、先生のお顔を見るのが怖かったことを覚えています。お蔭さまで、よく「ノーティー・ガールズ＝naughty girls」と呼ばれました。――最近になって、この「ノーティー・ガールズ」という言葉の中に「やんちゃなお嬢さんたち」といった優しさが込められていた筈だと聞いて、今更ながら、先生の愛情を感じています――。

あの頃は、真夏でもクーラーはもとより、扇風機もない家庭が普通だったようです。そんな夏のある日のこと、先生に呼ばれて部屋に入ると、私の素足を見られた途端に先生の温顔が厳しくなり、「貴女は、レイディーでしょう」と、おっしゃるのでした。改めて、汗だくになりながら、ストッキングを履いて、

出直したことを覚えています。

また、週に1回か月に1回でしたか、寮生全員と先生とのお食事会があり、一人ひとりとゆっくりとお話できる機会を設けて下さいました。日本語禁止のため、膝の上に辞書を用意するなど、それはそれは、苦痛の時間でした。しかし、先生は、寮生全員をわが子のように大切にして下さいました。クリスマスに戴いた小さな木彫りの小箱は今でも大切にしています。この小箱は当時のことを想い出させてくれる私の人生の宝物です。

どんなことがあってもぶれることなく、その凛としたお姿は今でも忘れることが出来ません。

この度、私の心のなかの、半世紀前の想い出を嚙みしめる機会を与えられ、本当にうれしく存じます。有難うございました。

ミス・リーの想い出

大西(旧姓大石)啓子　〔松蔭短期大学英文科 S.38年卒〕

私がミス・リーと親しくお話したのは、今から五十年以上も前のことになります。短大の北海道旅行の帰りに、田舎に帰る列車がなくて、「リー館」に下宿しておられた藤山(古沢)康子さんのところに一泊させていただいた時のことです。その夜はじめて、ミス・リーと親しくお話する機会を得ました。授業では常に厳しい印象を受けていましたが、その時はワンピース姿で、笑みを浮かべながら、きれいな日本語で旅行の様子などを尋ねて下さいました。十五分ほどの会話でした。その時のミス・リーの優しいお姿に触れたことを、今でもはっきりと覚えています。その夜は藤山さんと枕を並べて、時間の経つのも忘れて、旅行の話に夢中になっていました。すると、「コツ、コツ」と、何か棒のようなもので床を叩くような音がしました。最初は「何？」と思い、耳を澄ま

せますと、また「コツ、コツ」という音がするではありませんか。「あゝ、『静かにしなさい』というお叱りだなぁ」と気付きました。夏休みで、その時は私達二人だけで、その上、ミス・リーの寝室の真上の部屋に居ることを忘れてしまっていたのです。

その後、藤山さんと出会うと、「あの時の音は、箒、物差し、物干し竿？あれは一体何の音だったのだろうかしら？」と、必ず話題になります。

卒業後、リー先生は、「もう少し神戸にいたい」という私の気持ちを汲んで下さり、「リー館」に下宿しながら、聖ミカエル国際学校に勤務することが出来るように計らって下さったのです。その時の「リー館」の住人は五人で、食事は当番制、門限は八時、消灯は十時、テレビはありませんでした。門限が八時では、音楽会やダンス・パーティー等の楽しみに出かけることなど出来ません。余暇は、読書・手芸などと、品行方正な生活でした。

また、月に一度は、ミス・リーの書斎で、メイドさんも加えた、寮生全員の食事会があり、聖書の一節の朗読の後、先生が感謝の言葉を述べられるのですが、平凡な毎日を送っていた私は、心に留まる数々の出来事に気付かされました。また、卒業後もお宅でのお茶の会にご招待いただき、聖書の話などをお伺いしました。お勤め先の聖ミカエル国際学校でも週一回、ミルク・ティーをいただきながらのスタッフの meeting がありましたが、先生は常に、人との会話を大切にしておられました。一年九ヵ月もの間、先生のもとでお世話になり、多くのことを学ばせていただきました。

その後結婚し、披露宴にご出席いただいたとき、心温まるスピーチをいただいたのですが、その時、「彼は泥棒ね」というジョークをおっしゃって下さいました。優しさとユーモアに溢れ、常にメガネの奥の眼と口許に笑顔を湛えておられた先生を思い出します。色々とご指導いただきました。先生は、その想い出がいつまでも私の心の中に生き続ける恩師です。

リー先生の想い出

松田（旧姓大野）富子　〔松蔭短期大学服飾科 S.39年卒〕

松蔭短期大在学中の 2 年間、私は、学校だけではなく個人的にも、いろいろとリー先生のお世話になりました。はるか遠い昔のことで、記憶の定かでないところもありますが、思い出すままに綴ってみたいと思います。

私たち親子は、岡山の聖オーガスチン教会に通っていましたので、恐らくその関係でしょう。父が、私が松蔭短期大学のほうでお世話になれるように計らってくれたのだと思います。

「リー館」＝先生のお宅では、 2 人で二階の四畳半の一部屋を頂いていましたが、机を置いてお布団を敷いたら、もういっぱいでした。 3 部屋あって、先輩の方々との 6 人の共同生活でした。一階が台所で、そこには大きなテーブルがありました。一週間に一度、食事当番が回ってきましたが、食事の内容には頭を痛めました。「リー館」は神戸市中央区〔当時は生田区〕の山本通にあり、学校へは近くの加納町 3 丁目のバス停から青谷までバスで通学しましたが、田舎出身の私にとっては、神戸の街そのものが驚きでした。帰りには、時々、三宮駅から生田神社前を通り、山の方に向かって歩いて帰りましたが、近くの回教寺院の丸い屋根が見えてくるとほっとしたことを覚えています。

すべてが物珍しく、洗練された級友たちとの毎日毎日がとても楽しい日々でした。センター街や元町のガード下の沢山のお店、大丸百貨店。そして荘厳な雰囲気の聖ミカエル大聖堂、中に入る度に身の引き締まる思いがしました。今は、教会から離れた生活をしていますが、何かあるたびに、あの静かな大聖堂のことを思い出しています。

月に一回、全員でのお食事会があり、皆さんとともにリー先生を囲み、いろいろなお話に花を咲かせました。もっとも、英語の苦手な私などは、日本語だけのお話でしたけれども。いつも白いブラウスにスカート、ヒールのある靴を

履かれ、青い玉のネックレスを付けておられました。そして、そのブラウスの袖から白いハンカチを出しておられたのがとても印象的でした。

食事のときには、お手伝いの山元さんがミルク・ティーを入れて下さり、すっかりミルク・ティー党になってしまいました。そして、リー先生とのお食事会と云えば、ミルク・ティーのことが思い出されます。

もちろん、窮屈な思いもありました。夜遅くまでお喋りをしていて、ふと気が付くと、下からトントンと云う音が聞こえ、慌てて布団の中に顔を埋めたことも度々ありました。皆さんも、同じ経験をされていたようです。

お忙しい中、敢えて、年頃の私たちの面倒を見ることを引き受けて下さったリー先生のことを、せめてもう少し知っておきたかったと、今、改めて思い起こしています。